

『物理基礎/化学基礎/生物基礎/地学基礎』の「化学基礎」，『化学』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

「化学基礎」

1 前 文

「化学基礎」は、物質とその変化に関わる基礎的な内容を扱い、日常生活や社会との関連を図りながら、化学が科学技術に果たす役割などについての認識を深めるとともに、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

今回の共通テストにおける「化学基礎」の受験者数は90,939人であり、前回より1,955人減少し、全受験者数の19.70%であった。基礎の他の科目と比較すると、「生物基礎」(114,388人)に次いで受験者数が多く、また、「化学基礎」の平均点は27.00点であった。

なお、評価に当たっては、「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする。」との、共通テストの趣旨に基づき、21ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

内容については、「科学の基本的な概念や原理・法則に関する理解を基に、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究する過程を重視する。」との、共通テスト問題作成方針（以下、「作成方針」）に基づき、思考力・判断力・表現力等を要する問題が多かった。

基礎的な知識を問う問題と、思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスは適切であった。知識を問う問題では、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題のバランスについても十分配慮されていた。

範囲については、学習指導要領に示された範囲から出題されているが、作成方針に、「知識・技能や思考力・判断力・表現力等を新たな場面でも発揮できるかを問うため、教科書等で扱われていない資料等も扱う場合がある」と記載のあるとおり、「化学基礎」の教科書に記載されていない題材も扱われていた。これらの問題は、問題文や与えられた図を分析・解釈することによって対応できるように、工夫されていた。

第1問 学習指導要領に示された範囲からの小問集合形式の問題であった。

- 問1 原子の構造に関する知識を問う問題
- 問2 物質の反応に関する知識などを理解し、物質の識別方法を思考する問題
- 問3 原子のイオン化エネルギーと電子親和力に関する知識を問う問題
- 問4 物質中の化学結合に関する知識を問う問題
- 問5 固体の体積と密度から、気体に状態変化した際の体積を求める計算問題
- 問6 中和滴定の量的関係について、示された条件を基にグラフを選択する問題
- 問7 酸と塩基について、その定義を問う問題

問 8 酸化還元反応が起こっているかどうかを問う思考問題

問 9 ジャガイモの燃焼に関する量的関係についての問題

a 化学反応式の係数から生成物の質量の比を求める計算問題

b 反応後の水の質量から、反応前の物質に含まれる水の質量を求める計算問題

第 2 問 空気に含まれる気体成分の発見と質量保存の法則を題材とした総合問題形式であり、リード文による丁寧な説明と、与えられた図などを基に考察する問題であった。濃硝酸の分解や、窒素の発生の反応は「化学基礎」で学習しない内容であるが、リード文や図、化学反応式を用いて丁寧に説明されており、誘導に従って解答すれば十分理解できる内容であった。

問 1 濃硝酸の熱分解とそれにより生じる酸素に関する問題

a 化学反応式の係数を求める問題

b 酸素の性質に関する知識を問う問題

問 2 金属の酸化還元反応に関する問題

a 酸化水銀の生成において、消費された酸素の体積を求める計算問題

b 金属元素の単体及び酸化物の反応性に関する知識を問う問題

問 3 窒素の発生と、混合気体に関する計算問題

a 反応物の物質量と生成物の体積の値を基に、グラフを用いるなどして、反応物の質量を求める計算問題

b 混合気体中のアルゴンの体積百分率を求める計算問題

3 分量・程度

問題のページ数は12、大問数2、小問数12、解答数19（前回の共通テストはページ数12、大問数2、小問数13、解答数18）で、全体としての分量はほぼ同等であった。第1問は小問集合形式であったが、出題範囲や分量は適切であったと思われる。また、第2問は、リード文や図から必要な情報を読み取り考察する総合問題であったが、時間内に全ての問題を解答することは可能であったと思われる。

平均点は、前回の27.31点（54.62％）に比べ27.00点（54.00％）とほぼ同等であり、基礎的な知識を問う問題と思考力が求められる問題が適度に出題されており、難易の軽重についてバランスが取れていた。一方、次に挙げる問題は難度が高かったと思われる。

第1問

問 8（正答率13.66％） 小学校、中学校、高等学校等における観察・実験等で目にしてきた化学反応について、変化の過程を捉えた上で、必要に応じて酸化数を計算し、酸化還元反応を二つ選ぶなど、複数の思考を要求されていることが、正答率が低い要因になったと考えられる。

問 9 b（正答率35.15％） 化学反応により発生した物質の質量と、反応前から存在していた物質の質量を考慮し、反応の流れを整理して式を組み立てることを求められる問題である。題意を理解するまで時間を要し、正答にたどり着くことができなかった受験者も少なからずいたのではないかと考えられる。

第2問

問 3 a（正答率39.35％） 化学反応式が示され、反応物の物質量と、生成物の体積が与えられており、これらを基にグラフを用いるなどして、思考する問題であった。グラフの作成については縦軸、横軸を設定し、値を正確にプロットした上で、反応後に亜硝酸ナトリウム

が残っている範囲と、全て反応した範囲とに分けて直線を引いて交点を求める必要があるため、それぞれの場面における作業を、全て適切に行うことができなかった受験者も少なからずいたのではと考えられる。

問3 b（正答率4.32%） 気体の密度、混合気体の割合、平均分子量などを総合的に判断し、条件を整理して式を導き出す必要がある問題である。さらに、やや煩雑な計算が最後の問題として出題されたこともあり、正答にたどり着くことが困難であったと考えられる。受験者の思考力を問うという観点では、具体的な数値を求めるのではなく、適切な数式を選択させるような出題形式についての検討もお願いしたい。

4 表 現・形 式

全体として、問題文が非常に分かりやすく、理解しやすい表現が用いられていた。受験者にとって初見と思われる題材については、丁寧なリード文やイメージしやすい図が与えられたことで、受験者の負担を配慮したものとなっていた。また、必要な情報を適切に分析・解釈することができれば、複雑な計算を行うことなく解答できるような作問が多く、時間内の解答を可能とするための配慮がうかがえた。

形式としては、該当する項目を選択する問題（以下、項目選択）が5、該当する文章を選択する問題（以下、文選択）が4、計算が主体となる問題（以下、計算）が7（前回の共通テストは項目選択5、文選択5、計算7）で、全体としてバランスが意識された出題傾向であった。また、やや複雑な計算が求められる問題や、数値そのものを選んでマークする形式の問題が出題されたことで、計算力も問われた。

会話文形式の問題は、「生物基礎」で生態系を題材にして出題されたが、「化学基礎」においては、試行調査の段階から今回の共通テストに至るまで見られなかった。

個別の問題について、特徴的な点は次のとおりであった。

第1問 小問集合形式で、幅広い範囲から出題された。

問2 物質の性質や反応についての知識を直接的に問うのではなく、定性的な実験を組み立てる探究的な要素を含んでいる問題であった。

問5 ドライアイスが二酸化炭素の固体であること、密度を用いて、体積から質量を求めること、質量から物質質量を経由して、気体の体積を求めることなど、複数の思考の過程を整理する必要がある問題であった。

問6 溶液を測り取ってから水を加えて希釈することの捉え方を問うことは、中和滴定の実験において、共洗いをすべきかどうかを判断することにもつながり、各操作において、何を意図して行われているかを意識して実験に取り組むことの大切さを示す問題でもあった。

第2問 前回と同様に、大問全体を通して一つのテーマを扱った形式であった。今回は、空気に含まれる気体成分の発見と質量保存の法則に焦点を当て、酸素、窒素を題材にした内容で出題された。化学反応としては化学基礎の教科書にはほぼ記載のないものであったが、丁寧なリード文と与えられた図や化学反応式を基に出題されており、理解しやすい内容であった。一方で、直接的に出題した場合と比較すると、読解力が求められて、難易度が上がっている可能性も否定できないため、取り扱う文章の内容や量、表現等に関しては、今後も検討をお願いしたい。

問1 a 化学反応式の係数を三か所求める問題であるが、既に与えられている係数や原子の数などの情報を整理し、式を導き出すことで、複雑な計算を行うことなく解答できるため、多くの受験者が正答にたどり着くことができたと考えられる。（正答率77.66%）

問3 a 化学反応の量的関係について、グラフを用いるなどして思考させる問題であった。計

算で定点的に数値を求めるだけでなく、グラフから事象の変化を考えさせる問いは、実験の分析・解釈の理解度を確認する上で、非常に重要と考える。このような出題は、今後も継続を強く希望したい。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テストの趣旨に基づき、報告書（本試験）21ページに記載の8つの観点により、今回の共通テスト本試験の問題を検討した。

共通テスト5年目となる今回も、前回までに引き続き、「知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行う」ため、全ての問題が「化学基礎」範囲内の考え方で解くことができるよう工夫され、受験者への配慮が見られる問題が作成された。また、マークセンス式の解答方式という制約のある中で、適切に思考力・判断力・表現力等を問う問題が作成されていた。作問者の尽力に対して、深く敬意を表したい。

今回の共通テスト本試験の「化学基礎」では、前回までと同様に、第1問は小問集合形式、第2問は総合問題形式の問題が出題された。身近な物質がどのように人間生活や社会と関連しているかを問う問題が多く見られ、「化学基礎」の目標を踏まえた出題であった。

今後の試験問題の作成に対し、以下に意見をまとめ、提案・要望をしたい。

出題単元及び内容については、学習指導要領に記載されている、化学と人間生活・物質の構成・物質の変化の各項目から出題されていた。16問のうち、化学と人間生活から5問、物質の構成から4問、物質の変化から12問が出題された（重複を含む）。物質の変化の単元の内訳については、12問のうち、物質・化学反応式に関する問題が7問、酸・塩基に関する問題が3問、酸化と還元に関する問題が2問であった。昨年に引き続き、水溶液の濃度に関連した問題が出題されなかったが、幅広い学力層の受験者を識別するため、1問程度はあると良い。

日常生活や社会と関連する内容については、身近な現象や化学反応などを題材とした問題が見られた。第2問では、大問全体にわたり、空気に含まれる気体成分の発見と質量保存の法則に関する問題が出題された。空気中に多く含まれる、窒素、酸素、アルゴンについて、その発見の歴史や反応に関連して問題が構成されていた。この内容は、「化学基礎」で学習しない範囲であるが、リード文や図で丁寧に説明されていたため、誘導に従って解答すれば十分理解できる内容であった。一方で、濃硝酸の分解反応は、「化学」で多くの教科書が取り上げる内容であり、本内容を題材とすることは、「化学」の範囲の問題を演習した受験者に有利と誤解を生じかねない危険もはらんでいると考える。可能であれば、「化学」の教科書で取り上げない題材で作問できないか、検討をお願いしたい。

計算問題は7問23点（前回7問21点）出題された。与えられた数値が工夫されており、複雑な計算を行わずに正答を導き出すことができる問題が出題された一方で、与えられた図やリード文から情報を整理し、計算を行って正解を導き出すという思考力を必要とする問題も出題された。これらの問題の解答にはやや時間を要したのではないと思われる。幾つかの問題では、あらかじめ式量が表示されるなど、限られた解答時間の中で解答できるような配慮が見られた。

今回の共通テスト本試験の「化学基礎」の平均点は27.00点（前回27.31点）であった。基礎の他の科目の平均点と比べると、「物理基礎」24.78点、「生物基礎」31.39点、「地学基礎」34.49点と、科目によって差が生じる結果となっている。問題の難易度については、基礎全体として平均点がほぼ同等になるよう、引き続き配慮をお願いしたい。

全体としては、「知識・技能のみならず思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行う」ために、前回同様、化学の本質について問うための工夫や配慮を十分に感じ取ることができる出題であった。更に創意工夫された良問の作成をお願いしたい。

『化学』

1 前 文

化学は、物質やその変化に関する基本的な概念や原理・法則の理解を深め、原理・法則等を活用する能力を身に付けさせるとともに、理科の見方・考え方を働かせ、化学的な事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

今回の共通テスト本試験における「化学」の受験者数は183,154人であり、全受験者数461,505人の39.7%，「物理」，「化学」，「生物」，「地学」の全受験者数388,265人の47.2%が受験している。受験者は前回の共通テストの本試験180,779人より2,375人増加し、「物理」，「化学」，「生物」，「地学」で比較すると最も多かった（2番目は「物理」で144,761人）。ただ、その平均点は45.34点であり、前回の共通テストの平均点（54.77点）と比較しておよそ9点あまり減少し、センター試験時代を通して過去最低となった。

「大学への入学志願者を対象に、高等学校等の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし」、「各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする」との共通テストの趣旨に基づき、以下の3項目を評価の視点として、分析と検討を行った。更に「まとめ」として、高等学校の授業改善への影響や、共通テストへの意見・要望などを含めた、総合的な評価を行った。

(1) 内容・範囲

問題内容は適切か／知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題の出題も含め、バランスの取れた出題か／学習指導要領に定める範囲内の出題か／出題内容に極端な偏りはなく適切か

(2) 分量・程度

試験時間に照らして適切な分量か／設問数・文字数等は適切な量か／問題の難易度は適切か

(3) 表現・形式

学習の過程を意識した問題の場面設定がなされた問題が含まれており、教科・科目の本質に照らし適切か／設問形式や配点は適切か／文章表現・用語は適正か／図表や写真の扱いは適切かなお、評価に当たっては、21ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

内容については、令和7年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針（以下「作成方針」という。）にのっとり、「科学的に探究する過程を重視」した問題が含まれていた。

出題のバランスであるが、過去の共通テスト及びセンター試験における問題評価・改善の蓄積が生かされていたものの、全体的に文字数が多かったことや問題設定にやや複雑なものがあったことなどから、時間内に正答にたどり着くことができなかった受験者も一定数いたのではないかと推察される。基礎的・基本的な知識・理解を問う問題だけでなく、思考力・判断力・表現力等を多角的に問う問題も多く含まれていたが、前述の理由より、幅広い学力層の受験者の学力を測定できる構成としては難しかったと考えられる。

範囲については、「物質の状態と平衡」，「物質の変化と平衡」，「無機物質の性質」，「有機化合物の性質」，「化学が果たす役割」から幅広く出題されており、学習指導要領に示された範囲を網羅していた。また、中学校理科と関連する問題が1問，「化学基礎」の学習内容と関連のある問題が7問あった。加えて、日常生活や社会と関連付けた問題が5問，化学史を題材とした問題が2問出題され

ていた。このような題材は、「化学」の学習が中学校から高等学校へと連続していることだけでなく、身のまわりの自然現象や生活のあらゆる場面に学習内容が関連していることを伝える受験者へのメッセージとなる。引き続き、今後も出題を検討していただきたい。

第1問は、「物質の状態と平衡」からの出題であった。

問1は、高等学校で学習する基礎的・基本的な知識や理解を問う問題であり、学習してきた内容の定着を問う形式の出題は、今後も継続していただきたい。

問2、問4も、基礎的・基本的な知識や理解を問う問題ではあるが、正答には正確な知識が必要であった。このような問題は、受験者の学び方を踏まえ、慎重に検討していただきたい。

問5 a（正答率36.60%）、問5 b（正答率10.98%）は、海水を題材とした問題ではあるが、リード文が長く、設定が理解しづらかった。既習の知識や理解を活用して、身近な現象について思考力・判断力・表現力等を発揮して化学的に捉える問題は、受験者の学力を測定するために有効ではあるものの、今回のように設定が複雑だと、受験者の学力を正しく測定することができない一因になると考えられる。

第2問は、「物質の変化と平衡」からの出題であった。

問1は、様々な場面における化学的視点を題材にしていたが、なじみが薄いものが含まれていたり古文表記となっていたりしたことから、戸惑った受験者もいたのではないかと考えられる。選択肢の表記や表現については、問うべき知識や思考をシンプルに問うことができるような工夫をお願いしたい。

問3（正答率26.12%）は、弱酸の希釈におけるpH変化を連続的に捉えられるかという難易度の高い問題であった。ただ、電離の概念を理解していると選択肢が実質2択になり得ることから、出題には工夫をお願いしたい。ある点における電離度やpHを求める場面が多い中、変化をグラフで示すような問いは化学の本質的な理解を促すものであり、授業改善にも活かすことができると考えられることから、引き続き出題を検討いただきたい。

問4 cは、反応条件を変化させたときのアンモニアの体積百分率の時間変化を問う問題であった。グラフを解釈し、反応条件に適するものを選択するという受験者の思考力を問う問題は、共通テストとしてふさわしい良問であった。必要な情報を得るためには既出のグラフに戻る必要があったが、気付くことができなかった受験者もいたのではないかと推察される。

第3問は、「無機物質の性質」からの出題であった。

問1、問2、問3は、いずれも正答には正確な知識が必要であった。問3のような形式は初めて出題されたが、化学反応や物質の性質について正確な知識を理解しておくことは化学の学習において大切であり、今後も定期的に出題していただきたい。

問4 c（正答率34.79%）は、「化学基礎」で学習した化学反応の量的関係を活用してヨウ化ナトリウムの濃度を求める基礎的・基本的な問題であったが、正答率はそれほど高くはなかった。与えられた化学反応式の活用や、計算そのものを苦手とする受験者が少なくないことがその要因と考えられることから、このような出題を継続していただくことが高等学校での授業改善につながるメッセージになるのではないだろうか。

第4問は、「有機化合物の性質」からの出題であった。

問2は、反応物の構造を条件Ⅰ～Ⅲから類推する問題であったが、分子量の条件を満たすかどうかを確かめるにはやや時間を費やしたと思われる。全体的に時間を要する問題が多かったことから、受験者の負担を減らすような工夫があると有り難い。

問4 bのような形式も今回初めて出題されたが、ビニロン合成経路の正確な知識を理解しなくても、反応前後の構造から類推できるような工夫がなされていた。有機化合物や高分子

化合物では、構造上の特徴から反応を類推する思考が不可欠であり、良問であった。今後もこのような出題を継続していただきたい。

問4 c（正答率28.86%）は、アセタール化を題材とした量的関係を問う問題であるが、割合の概念が含まれており、思考力を必要とする難問であった。図には実際の重合度を示す数式が記載されていたことから、戸惑った受験者もいたのではないかと考えられる。しかし、収量計算や構造の一部だけが変化するような問題は、受験者の学力を正しく測定するために必要不可欠であると考えられる。

第5問（第6問）は、「化学が果たす役割」を基に、原油の精製を題材とした総合問題であり、中学校理科や「化学基礎」の学習を踏まえて出題されていた。

問1（正答率20.75%（第6問22.16%））は、日常生活で利用する物質が含まれている原油の分留そのものを問う問題であったが、受験者にとっては留出物になじみがなく、難易度が高かったと考えられる。

問3 c（正答率26.51%（第6問36.88%））は、反応前後におけるエンタルピー変化を題材にした問題であった。反応経路に着目するだけでは正答にたどり着けないよう工夫されており、高等学校での授業改善が必要といえる問題となっていた。

3 分量・程度

大問5問構成（第6問は旧教育課程履修者等が選択）であった。また、小問数は30問であり、前回の共通テスト本試験から1問増加した。その中には計算問題が11問あり、前回と同数であった。一方、グラフの掲載が4問含まれており、前回（10問）と比較すると大幅に減少した。前回と比較して、問題は33ページと同じであったものの、グラフから読み取るような問題が少なく、リード文が長いものや問題の設定を理解するために時間が必要な問題が多かったことから、受験者にとって大きな負担となっていたと考えられる。さらに、計算が煩雑な問題や思考力・判断力等を必要とする問題も全ての大問に含まれていたことから、受験者の中には時間が不足した者が少なからずいたと思われる。

第1問問5 bは、逆浸透を基に、溶液の濃度や浸透圧、化学平衡など複数の分野の思考を組み合わせ、大変難易度が高い問題であった。複数の思考を組み合わせたこのような題材は、受験者の思考力を測る問題としてふさわしく、学力の高い受験者を識別するために必要ではあると考えられるものの、その難易度についてはくれぐれも慎重な検討をお願いしたい。

第1問問2，問4，第3問問1，第4問問1，問3，第5問問3 bは、教科書にそのまま記載されている基礎的・基本的な知識や理解を問うものであった。思考力や判断力等を問う問題も大切ではあるが、そのような難易度の高い問題に取り組むためには、基礎的・基本的な知識・理解が大切であるということを受験者へ再確認させるメッセージだと考えられる。また、第1問問1，第2問問2，第3問問4 a，問4 b，問4 c，第5問問3 a，問3 dは、「化学基礎」で学習した知識・理解や概念を含む、または、応用した問題となっていた。「化学」の学習においては「化学基礎」が土台であり、数的処理能力も含めてしっかりと身に付けた上で学びに向かいたい。

4 表現・形式

第1問から第5問まで、作成方針に示されている「高等学校の段階において身に付けた基礎的な力を問う」ための問題という作問のねらいにおおむね沿っていた。しかし、問題の設定や選択肢の表現が受験者にとってやや分かりづらかったり、文章が長かったりしたものが散見されたことから、理解に時間が必要であったと思われる。その一方で、計算問題では比較的計算しやすい値が設定さ

れていたことや、グラフは読み取りがしやすいよう補助線が破線となっていたこと、有機化合物の構造はなるべく大きく図示されていたことなど、受験者への配慮も多数見受けられた。これまで指摘していた点を踏襲し、引き続き改善していただいたことに感謝を申し上げる。

受験者の思考力や判断力等を識別する問題についてであるが、方眼紙に受験者がグラフを書くような問題は今回出題されなかったものの、リード文をしっかりと読んだ上で与えられた条件を理解し、容器内の圧力や生成物の割合、高分子化合物の構造などを問う問題が出題されていた。学習指導要領には、「観察、実験などを通して探究し、(中略)規則性や関係性を見いだして表現すること」とある。反応等の条件を踏まえ、これまで学習した概念や原理・法則を活用して規則性や関係性を見だし、結果を推測して表現するという学習活動は、深い学びの実現に向けて大変重要であり、必要不可欠な要素である。このような学習活動を題材とした出題は、受験者の思考力や判断力等の識別に十分期するものと考えられるが、その一方で現実に即するほど条件設定が複雑になりやすいことから、条件や分量、難易度等については慎重に検討していただきたい。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テストの意義として、幅広い学力層の受験者の学力を定量的に測定できることが理想である。また、「物理」、「生物」、「地学」との平均点及び標準偏差ができるだけ近くなることが望ましい。今回の共通テストでは、「化学」の平均点は45.34点、標準偏差は20.02であったのに対して、「物理」の平均点は58.96点、標準偏差が22.72であり、平均点をみても13.62点の差が生じる結果となった。この結果を見ても「化学」の難易度が高いものであったことがうかがわれる。得点調整までには至らなかったものの、科目間で有意に差が生じた今回の結果は、共通テストの作問段階において一考を要するものであるといえる。

今回の共通テスト「化学」の本試験において、出題分野に偏りがなく出題されていたことや、出題された問題の多くが学習指導要領に準拠した問題であったことは評価できる。しかし、思考力や判断力等を要する問題の出題が多かったことや、文字数が多く読解に時間を費やしたと考えられる問題が多かったことなどについては、今後の課題であると考えられる。受験者が60分間で解答することを想定したとき、試験問題に十分に余裕をもって向き合い、根拠をもって解答することが大切であり、そのための時間を確保することについて慎重な検討をお願いしたい。

全体の構成についてであるが、例年と同様に、第1問から第4問までは分野別の出題であり、第5問は分野横断型の総合的な問題となっていた。加えて、配点についても全ての大問で均一(20点)であった。新学習指導要領となり初年度の共通テストであったが、大問構成に変化はなかったことから、受験者にとって大きな混乱はなかったと思われる。昨年度までの報告書では、第4問に有機化合物及び高分子化合物の二つの分野が含まれることや、問題数や配点の工夫などが課題として挙げられていた。新学習指導要領では有機化合物及び高分子化合物の分野は「有機化合物の性質」としてまとめられたことから、共通テストとして出題される大問構成としては非常にバランスの取れたものとなっていた。特に第5問の総合問題については、今回は身の回りの現象を題材としており、まさに「化学が果たす役割」を体現した問題となっていたと捉えることができる。

5回目となる共通テスト「化学」の作問に当たっては、出題範囲及び内容は学習指導要領の範囲内であり、学習が中学校から高等学校へと連続していることをうかがわせる良問が多く含まれていた。しかしながら、平均点が過去最低となったことを踏まえると、幅広い学力層の受験者の学力を正しく測定できる問題構成は、今後の課題として挙げることができる。受験者の実生活や高等学校での授業に沿った形での出題について、今後検討していただけるよう申し上げたい。末筆ながら、作問された方々が幾度も議論を重ねてこられたこと対しても大きな感謝を申し上げたい。